

時評

総合地球環境学
研究所教授
佐藤洋一郎



久しぶりに伊豆を訪れる機会に恵まれた。近海でとれた新鮮な魚はさすがにこの地ならではのもの。しかし今、伊豆に限らず日本中で、近海魚の未来に赤信号が灯っているように思う。というのも、今では山が荒れ、海に流れ込む川が、十分な量の水とミネラルを供給で

きなくなりつつあるからだ。意外なことに、漁場、特に近海の漁場は、豊かな川の流れなしには成り立たない。川が荒れば海は荒れる。海が荒れば魚はとれなくなる。このことは歴史が繰り返して教えるところである。

もつひとつの心配は急速な養

近海魚の未来に「赤信号」

殖の広まりだ。魚は一部をのぞいて天然ものが多い。最近でこそ養殖ものがふえたが、牛はむしろ豚でさえ天然ものがほとんど存在しないことを思えば、その違いは歴然としている。魚に関するかぎり、私たちの文明はまだ「狩猟採集の時代」の延長にいる。一万年以上も前、私たちの祖先は一部の動物を家畜にし、土地を囲ってそこに住ませた。人類の祖先たちは乱獲によって大型の哺乳類のおおかたを絶滅させてしまった。価値がないと判断されたいくつかの動物たちは、家畜たちとの餌として隅に追いやられた。一万年前に祖先たちが陸上の動物たちにしたのと同じことを、今に生きる私たちは今度はどういうことが起きないだろうか。

私のこの心配は、マングローブの森の多くがエビの養殖場と化した熱帯の海の歴史を見れば、単なる杞憂ではないことがわかるだろう。どこまでを養殖で間に合わせ、それ以外はきちんとした資源管理の下におくかはよく考えておくべき問題である。それは高い鮪をちよつとだけ食べて満足するか、それとも安い養殖ものをたくさん食べるかという究極の選択につながる。養殖は必要な技術とと思うが、海岸沿いの小さな寿司屋で思いもかけず出会った、名も知らない近海もの(うまさ)を、近海ならではの食文化として次の世代に伝えることもまた大事であると思うのである。

資源管理、消費者にも責任

ちの祖先は一部の動物を家畜にし、土地を囲ってそこに住ませた。人類の祖先たちは乱獲によって大型の哺乳類のおおかたを絶滅させてしまった。価値がないと判断されたいくつかの動物たちは、家畜たちとの餌として隅に追いやられた。一万年前に祖先たちが陸上の動物たちにしたのと同じことを、今に生きる私たちは今度はどういうことが起きないだろうか。

私のこの心配は、マングローブの森の多くがエビの養殖場と化した熱帯の海の歴史を見れば、単なる杞憂ではないことがわかるだろう。どこまでを養殖で間に合わせ、それ以外はきちんとした資源管理の下におくかはよく考えておくべき問題である。それは高い鮪をちよつとだけ食べて満足するか、それとも安い養殖ものをたくさん食べるかという究極の選択につながる。養殖は必要な技術とと思うが、海岸沿いの小さな寿司屋で思いもかけず出会った、名も知らない近海もの(うまさ)を、近海ならではの食文化として次の世代に伝えることもまた大事であると思うのである。

さとう・よういちろう氏 京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2003年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「DNA考古学のすすめ」(丸善ライブラリー)など。

執筆者略歴